

北陸大学図書館報

NO.52



◆◆ 第21回読書感想文・第3回書評コンクールと 第4回ビブリオトークを終えて ◆◆

図書館長・薬学部教授・読書感想文・書評コンクール審査委員長

鍛治 聡

このたび第21回読書感想文・第3回書評コンクールが実施され、最終的に感想文179編、書評45編の応募作品がありました。コンクールに参加してくれた学生の皆さんと本学教員・職員・関係者の方々に御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。厳正なる審査の結果、最優秀賞1名（感想文）、優秀賞4名（感想文2名、書評2名）、佳作11名（感想文7名、書評4名）、努力賞10名（感想文7名、書評3名）の計26名を、各学部1名ずつの図書館委員4名と図書館事務1名の計5名で選出させていただきました。今年度は直接審査に関わることはありませんでしたが、皆さん一人ひとりの作品を読ませていただき、あらためて読書で疑似体験することで得た心情・思考を自分の文字で発信することが如何に大切かを改めて認識しました。次年度もより多くの作品が寄せられることを期待しております。

表彰式・ビブリオトークを令和3年12月22日（水）17時15分から図書館4階ソフィアルームにて開催いたしました。今回は、コロナ禍のなかではありますが、表彰式及びビブリオトークを何とか対面で実施することができました。新型コロナウイルスの第六波も考慮し、過去に例を見ない前倒しで実施しましたが、その後にまん延防止等重点措置の対象となりましたので、正解であったのだろうと考えております。

表彰式では、昨年度のパソコンの画面に向かって読み上げる何とも言えない摩訶不思議な感覚と違い、優秀賞以上の入賞者のみになりましたが、対面にて手渡しで渡すことができ大変嬉しく思いました。（ただし、残念ながら、参加人数を絞りに絞って行いました。出席できなかった受賞学生に皆さんにはこの書面を借りてお詫びします。）

また、ビブリオトークも入賞学生・審査委員・図書館事務課の職員が円座になり、和気藹々としたトークになり、実に生き活きかつ闊達なトーク。本が好きで、読むことが好きで、そして伝えることが好きなんだなあと感動を覚えました。この紙面を借りて、一人ひとりのトークを実況中継と行きたいところではありますが、割愛させていただき、今後の表彰式とビブリオトークにさらなる工夫を盛り込むことを期待いただきたいと思います。繰り返しますが、次回のさらなる応募作品の増加を祈念します。



第21回読書感想文・第3回書評コンクール

審査結果発表

応募作品224（感想文179・書評45）編の中から、次の作品が選ばれました。

入賞作品

最優秀賞（読書感想文の部）

宮崎琴音さん 変わるもの、変わらないもの (薬) 3年

優秀賞（読書感想文の部）

落合裕香さん お金の本質を学ぶ (経) 3年

岡本朝夏さん 学生時代の目標 (医) 1年

優秀賞（書評の部）

高村勇氣さん すぐやる人になりたいな (経) 1年

坪内心音さん 新型コロナウイルスの利用法 (国) 1年

佳作（読書感想文の部）

布島未葵さん 選択肢があるということ (薬) 3年

遠藤一真さん 何のために学ぶのか (経) 3年

平澤仁美さん 常勝集団への第一歩 (経) 3年

表さくらさん 人々のアジア—民際学の視座から— (国) 1年

齋藤凜香さん 吉田松陰から学んだこと (医) 1年

森田智帆さん 『本好きの下剋上』を読んで (医) 1年

吉田鈴奈さん 普通の定義 (医) 1年

佳作（書評の部）

橋馬健人さん 二人が降らす雨 (経) 2年

下出千陽さん 翻訳ってなんだろう？ (国) 2年

藤木美妃さん 「心にとどく」 (国) 2年

三膳慧太さん 『サピエンス全史』から自己を省みる (国) 2年

努力賞（読書感想文の部）

浦口耕太郎さん コーヒーが冷めないうちに (経) 3年

中村綾花さん 『君たちはどう生きるか』を読んで (国) 1年

平田愛朋さん 日本人の心遣い (国) 1年

松本芽依さん 「命」の大切さ (国) 1年

辻このりさん 当たり前の存在 (医) 1年

中山知優さん 考え方と価値観 (医) 1年

山田有莉さん 医療者として (医) 1年

努力賞（書評の部）

上野麻日さん 異文化はすぐそこにある (国) 2年

谷内彩乃さん 虫を研究するということ (国) 1年

川東孝太郎さん 『嫌われる勇気』を読んでみて (医) 1年

ベストタイトル賞

吉田鈴奈さん 普通の定義 (医) 1年

（書名『コンビニ人間』）

*（薬）は薬学部、（経）は経済経営学部、（国）は国際コミュニケーション学部、（医）は医療保健学部です。

最優秀賞（読書感想文の部）

変わるもの、変わらないもの

薬学部 3年次生 宮崎 琴音さん



書名 色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年
著者 村上 春樹
出版社 文藝春秋

私は小説が好きだ。1冊これだ！と目をつければ、途中でページをめくる手を止めることなく読み切ってしまう。そして、その目まぐるしく変わるストーリーや個性的な登場人物に感情移入しては、きれいに収束する結末に満足感とある種の感動を抱いて本を閉じる。しかし、この本は違った。『色彩を持たない多崎つくると彼の巡礼の年』。このタイトルは一体何を意味するのだろうか？と興味をもってこの本を手にしたのは1年も前のことだ。強く心に訴えかけて気づきをくれる言葉や主人公の成長、未来を感じさせる結末と、紛れもなく私が好きな「小説」だった。しかし、当時の私には大事どころを読み落としている感じがした。これは時間をおいてももう一度読まなければいけない。そんな思いを持って本棚に戻した。そしてこの夏、昨年残した未解決問題に決着をつける気持ちで、私は再びこの本を手にとった。

物語は主人公「多崎つくる」が絶望し、死の淵にいた大学生活から幕を開ける。彼には高校時代に、彼の言葉で“完璧な調和を成す関係性”と称する、強い絆と居心地の良い空気感を持った男女4人の親友がいた。親友たちの名前にはそれぞれ色が含まれており、アカ、アオ、シロ、クロと呼び合った。つくるだけが色を持たなかった。電車と駅が好きだったつくるは工学を学ぶために一人、東京へ出てきた。彼らの良好な関係性は大学に来てからも暫く続いていたが、ある日突然4人から絶縁を言い渡されてしまう。そのショックで死の間際まで追い込まれたつくるは、過去に蓋をすることで何とか生き延び、人に興味を持たず漂うように人生を過ごすことになる。そんなつくるは36歳で、気になる女性、沙羅と出会う。彼女は今でもつくるの心に昔の傷が残っており、過去と向き合う必要があると訴えた。つくるは、彼女の助けを受けて16年越しに友人達のもとを訪ね、当時何が起きたのか真実を探る旅に出るのだった。

私は昨年20歳で成人式の年だったため、状況は違うものの、つくると同様に、昔なじみの顔と5年ぶりの再会をした。私は皆に会える日を人一倍心待ちにしており、成長して綺麗になった姿を見て嬉しくなった。その一方で、言葉を交わすと、それぞれの過ごしてきた環境や出会った人、時間との向き合い方の違いから、私たちの間には大きな変化と違いが生まれていることに気づかされた。私はとてつもない違和感を覚えていた。

この本の中で、まさにそれと似たことをつくるは語ってくれている。つくるは友人たちを訪れて、短い再開の時を過ごした後、「語られないことはたくさんあった。しかし、語られるべき大事なことはほとんど残っていないように感じた」と話している。「人はそれぞれに違った速度で成長していくし、進む方向も異なってくる」という言葉が出てくるが、これは私も実際に感じたことだった。彼の言う“完璧な調和を成す関係性”とは、皆が同じ方向を向いていると何の疑いもなく信じられる純粋な若さや不器用さ、熱意がある“あの頃”特有のものだったのではないだろうかと思う。私はそれぞれの場所で価値観が変わり会話が噛み合わなくなっていく関係性の変化に対して、少し寂しい思いをした。

物語でのつくるは、かつて同じ熱を持っていた友人たちと道を違い、再び交わることがない予感のことを透き通った悲しみ、手の届かない悲しみと表現している。そんな中で、クロの「生きている限り個性は誰にでもある。それが表から見やすい人と、見えにくい人がいるだけだよ。」という言葉は彼の背中を押した。色彩を持たない＝個性がないと思いつくは親友達の言葉をきっかけに、自分の色に目を向け始め、「何を入れてもいい美しい器」になろう、不完全だとしても「誰かを迎え入れるための駅」をつくらうと考えるのだ。過去の自分たちの関係性と思い出を二度と得ることができない大切なものと感じながらも、沙羅という女性を相手に今を生きようとして成長していく。私はそんなつくるの生き方にどこか救われる思いを持った。

1度目に読んだときは、自分の個性に目を向けることの大切さに気付く、私は一步、歩みだすことができた。そして自分が変わっていくにつれ、今まで大事に思っていた関係性が失われていく感覚を持った。人生経験の少ない私はその変化に戸惑った。そんな時にまたこの本を読んだ。すると、かつての日々がそれ自体として大切に色褪せ

ることではないことを思い出し、変わること、成長していくことへの不安が軽くなった。まさにつくるとともに、自分の過去を巡視したようだった。人は変わるもの。時代も変わるもの。子供の頃夢中になったゲームやおもちゃは成長と共に手を離れていく。日が暮れるまで公園でブランコを漕いでいた小学生時代、部活に明け暮れた中学生時代、目標や理想を描いて勉強に邁進した高校時代も過去のこと。そして、その日々を共有した友人たちもまた、それぞれ自分の人生を歩んでいる。その時の自分にとっては確かに必要なものだった。そう考えると、変化を悲しむ必要はないと思えた。眩くかけがえのない思い出の日々を胸に今の私がある。だからこそ、私が生きている「今」を大事にして生きていきたい。「今」目の前にいる人を大事にしたい。この本を読み返して、そんな前向きな気持ちになれた。

私にとって一人の青年にスポットライトを当てて「人」が持つ強さと繊細さを描いたこの本は、読むたびに新しい発見があり、自分に寄り添いながら歩んでくれる、人生の友人の様な特別な存在だ。この本もまた、確かに今の私に必要だった。私は自身が持つ違和感と重ね合わせ、真剣にこの本と向き合えたと思っている。それでも尚、人生に対する示唆に富んだこの本が持つメッセージを受け止めきれない気はしない。3度目に読むときはどんな発見があるのだろうか。どんな私になっているのだろうか。なんでも入る器になろうと決めて歩き出したつくるのように、自分の殻を破り、変化を受け入れ、ゆうゆうと自分のペースで自分の人生を楽しむ、しなやかさを持つ人になりたい。また一つ成長した自分に出会いたい。そんな自分の未来と変化に思いを馳せ、また読む日に期待して再びそっと本棚にしまった。

審査委員講評 毎田 千恵子 (薬学部講師)

小説が好きで多くの本を読んでいる宮崎さんが、最初に読んだ時から一年を経て再読した時の感想が自身の体験と合わせて書かれた感想文でした。私は村上春樹の小説を読むと、自分はこの本を正しく読んでいるのだろうかと思うことがよくあります。様々な読者が多様なとらえ方をしているのが村上春樹の小説ではないでしょうか。宮崎さんは過去と現在の自分が、経験や成長によって同じ小説から異なる感情が生まれ、新しい発見があることを体験しています。自分が成長した時に、また読みたいと思える本に出合えた喜びを感じる素晴らしい感想文だと思います。

優秀賞 (読書感想文の部)

お金の本質を学ぶ

経済経営学部 3年次生 落合 裕香さん



書名 なぜゴッホは貧乏で、ピカソは金持ちだったのか?
著者 山口 揚平
出版社 ダイヤモンド社

みなさんは「お金」の本質について考えたことはあるだろうか。私はこの本を読むまで「お金」というモノは、モノとサービスを購入するうえで必要なもの、という簡単な意味で捉えていた。しかしこの本を読んだ今、「お金」というモノを多角的に見ることができ、様々な側面を知ることができた気がしている。

私がこの本を選んだ理由が、本の題名にある。「なぜゴッホは貧乏で、ピカソは金持ちだったのか?」この疑問を単純に知りたいと思ったのだ。さらに表紙の「お金の正体を知れば、僕たちはもっと自由に生きられる」という文、自分自身、バイトでの給料が月10万を超えるほど熱心にバイトをすることがあり、お金は頑張って働いた自分への報酬だという堅いイメージを持っていた。このイメージは文にある自由という単語とはかけ離れたイメージであった。お金は誰もが欲しがらるモノであり、お金があれば世の中の大抵のものは手に入ると、お金という存在自体が大きき力を持つと考えていた。そしてこの本を読み、自分の考え方が浅はかであったと今では感じる。

この本は、筆者の社会での経験をベースにお金について語られている。お金というモノについて悩み、縛られ、その上で筆者なりのお金というモノの考えの結論へと導いた記録をピカソが金持ちになった理由と絡めて、第一章から第五章の5つに分けて記している。その中で私の心に残った筆者の考えがいくつもあった。

まずその一つ目として、自分がお金に縛られた生活をしていると気づかせてくれる文があった。「まず幸せな状態をつくること、次にそれを長く楽しむためにお金がある」という筆者の考え方だ。お金というモノは絶対的な存在ではない。幸福というものはお金や物という一見外側にあるように見えて、実際は心が知覚を通じてその物質を解釈し、幸せと感ずることにある。この考え方には驚かされた。今までお金の上に幸せがあり、幸福はお金で買えると考えていた。しかし実際はこの考え方自体がお金に縛られていたのだ。「心を満たすお金」だけでなく「心をコントロールする意思」との両方がそろって初めて、人は幸せになれる。お金は持てば持つほど欲望は膨らむ。それに合わせて心をコントロールする力を育てる必要がある。このことを知った時、今お金持ちでもなんでもない自分が日々の中で感じる幸せを尊く感じる事ができた。

次に二つ目として、使命が価値に転じ、その価値が転じてお金となるという筆者の考えを知った。お金とは常に結果である。人生の長い期間をかけて価値を創造してきた結果、目に見えるものとしてお金が生まれるという考えだ。例えば物を作る企業でも同じことだ。長い期間をかけて一つの信念を貫き、コツコツ良い評価を溜めた企業のものほど世間から信用がつく。この信用が大きな価値なのだ。私は中学生の頃部長を任されていた。2年という歳月、コツコツ練習を積み重ね、努力を続けたうえで部長という大役を任せてもらった。これは部員、さらに顧問の先生からの信用を溜めたということに他ならない。筆者は本書の中で何度も価値は信用によってつくられることを述べている。お金も同じように信用によって大きくすることができると思うんだ。

三つ目に企業や個人が国家に代わってお金を作る時代へと変化しているという考え方だ。これは考え方というよりも事実ともいえる。近年のキャッシュレス化の文字のごとく、お金の現物つまり実体を所持していても契約が成立する。そしてその一種にポイントという企業通貨がある。これらを使用してモノやサービスを買うことが可能になりつつある。企業の力は年々力を増し、国家に迫るほどの財力を持ち合わせるほどになっている。大企業という信用をもとに企業独自の通貨としてポイントが存在するのだ。個人としてもネットが普及した現代では他人の情報を知ることが容易である。相手を知ることができるという信用やネットの普及によって、お金を介さずとも物々交換のように信用をもとにした取引ができる時代である。国家の発行するお金をモノとして持たずとも、自らも契約を行う手段があることに気づいた。

これらの筆者の考えから、お金の本質にあるものの一つとして信用について深く学んだ。信用をもとにしたお金の在り方を知ること、自分の中でのお金の印象も柔軟なものへと変わったと感ずる。そしてこれから生きていく中で自分なりのお金の定義を見つけていきたいと感じた。

審査委員講評 **田邊 良和** (図書館事務課長)

今回、お金に係わることは書き難い面があったかと思いますが、落合さんは自身の経験を交えながらお金の本質についてよく考えまとめていると思います。私自身も落合さん同様、「お金の本質にあるものの一つとしての信用」について色々と考えさせられました。

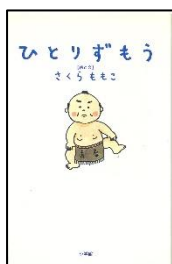
これからも落合さんには様々な経験を通してお金の定義や自分自身の役割を考えていってほしいと思います。

優秀賞 (読書感想文の部)

学生時代の目標

医療保健学部 1年次生

岡本 朝夏さん



書名 ひとりずもう
著者 さくら ももこ
出版社 小学館

学生時代というものは、主に小学生、中学生、高校生、大学生と続き様々なことを学んだり、感じたりする時代である。色々なことを体験する中で、うまくいくこともあれば失敗し挫折することもあるだろう。それにちょうど思春期とも時期が被っているので、その時期独特の考え方をもちがちである。私は今年大学に進学し、大学生になった。つまり学生時代の真ただ中にあるのである。そ

んな私が今回読んだ『ひとりずもう』は、『ちびまる子ちゃん』や『コジコジ』など数々の作品を世に残したさくらもこさんのエッセイである。この本は、もともと私の母が持っていたもので「この本面白いよ。」と高校生の私に勧めてくれた思い出の一冊だ。笑えるところも多く、共感するところも多いこの本は私のお気に入りの一冊になった。今回読書感想文を書くにあたり、再び『ひとりずもう』を読んでみて、以前読んだ時と同じところで笑うこともあったが、高校生の時読んだ時とは違う印象を受けた。その感想を今から書いていきたい。

まず『ひとりずもう』では、さくらもこさんの中学生から短大在学中に投稿していた漫画のデビューが決まるまでが書かれている。学校で友達と話していたことや趣味のこと、家族のことや好きな異性のことなどさくらさんの他愛ない思春期時代の出来事が紡がれる中で、私が共感したところは、さくらさんが高校生の時にたくさん時間をかけて書いた最初の漫画を雑誌に投稿したが、思うような結果が出ず、挫折して一度漫画家になる夢をあきらめたところだ。その時にさくらさんは「私は自分の身の程を知ったのだった。自分の身の程を知り、ひとつ利口になったのかもしれない。こうして大人になっていくのだろうか。」と感じたという。私も大学受験のために受験勉強をしていた時、たくさん勉強したのに思うような結果が出なかった時がある。それまでは定期テストや模試では、自分の思うとおりのいい成績をとれていたのでも慢心していたのだと思う。受験生だった3年生のときやった模試を通して私は自分の身の程を知った。また私が心動かされたところは、さくらさんが少女漫画からエッセイ漫画へ作風を方向転換し、高校3年生の夏休みに必死に漫画を書いているところだ。「夏休みになり、睡眠時間以外のすべての時間を漫画のために注いだ。もう去年のような何もしない夏休みではなかった。」とさくらさんは言っている。私は自分がここまで夢中になれるものに出会ったことがない。それと同時にここまで夢中になれるものに出会える人がうらやましいと思う。さくらさんのこの話を読んで夢中になれるものに出会いたいと強く思った。

大学時代は人生で最後の学生でいられる時代である。私は今回この本を読んで、この最後の学生時代で自分のやりたいこと、挑戦したいことを見つけ、それをできる限り実行したいと思う。私は医療保健学部なので、資格取得のためには学ぶことも多く、勉強することが第一優先である立場であるけれども、それだけではなく時間が自由に使える今しかできないことをやってみたい。今はまだ見つからないけどそれを見つける努力をしたい。それが成功しても失敗しても一生の思い出になると思う。初めて『ひとりずもう』を読んだ時には、大きな挫折もしたことがなかったし、学生であることが永遠に続くように感じていた。しかし今は本の言葉一つ一つが心に響き感じ方が全く違うことに気が付く。今度もう一度この本を読むころには夢中になれることが見つかることを願う。その時はどんなところに共感するのか。前と同じところがそれとも全く違うところか。もし違うところに共感できていたなら私は、うれしい。

審査委員講評 轟 里香 (国際コミュニケーション学部准教授)

気に入った本を繰り返し読むと、読む度に違った感想を持つことがあり、自分の変化あるいは成長に気づかせられる。これが読書の楽しみの一つである。受賞作は、このことをよく表し、将来の自分の成長への期待も示されており、読書のすばらしさが表現されている。

優秀賞（書評の部）

すぐやる人になりたいな

経済経営学部 1年次生 高村 勇気さん



書名 「すぐやる人」と「やれない人」の習慣
著者 塚本亮
出版社 明日香出版社

本書は、すぐやる人とやれない人の習慣の違いについて述べており、すぐやれない人がどのようにしてすぐやる人になれるのかについて、思考編、自分を動かす編、周囲を動かす編、感情マネジメント編、体調管理編、時間・目標管理編、行動編の七つの章に分けられ説明されて

いる。すぐやる人とは、行動が速く生産性の高い人のことである。すぐやれない人とは、物事を後回しにし、行動が遅い人のことである。

この本の著者もやれない人であったが、考え方を改めて、すぐやる人とやれない人の違いを考えた。そして、高校時代偏差値 30 からケンブリッジ大学入学し活躍できるような人となった。

すぐやる人とやれない人とは、何事においても大きな差が生まれる。すぐやる習慣が身につけば、今まで以上に充実した毎日を送ることができる。すぐやる人は、強い精神があるのではなく、簡単に自分を動かす仕組みを作るのがうまいのである。周りの人や物をうまく活用し自分を動かしている。まずは、自分の考え方を変える必要がある。

本書では、実際に自分を動かすにはどうすればよいのか説明されている。自分を動かすには、環境を変えるのが重要である。誘惑が多い環境で課題に取り組むことは、意志の強い人であっても難しい。誘惑がなく、自分が集中できる環境に行くことがすぐやるための第一歩である。また、すぐやる人は簡単なことから始める。難しいことから始めた場合すぐに疲れ切ってしまう。やる順番を変えるだけでも心理的負担は変わってくる。簡単なことをすぐに終わらせるという習慣づけることが重要である。

また、本書では周囲を動かすことも重要であると説明されている。「すぐやる人は人を楽しませることが好きなエンターテイナーです。」と示されている。相手を楽しませ、自分も楽しむという考えを持つことで相手の気持ちを理解できるようになる。周りの人と良好な関係を築けることができれば行動する楽しさを感じやすくなるのである。

本書は、他にも様々な視点からすぐやる人とやれない人の違いを述べている。興味を持った人は、一度読んでほしい。

私は、現在、大学一年生である。大学では行動力があり、行動するスピードが速い方がよい。私自身は、嫌なことは後回しにする癖があったため、何事にもすぐに取り組める人間になりたいと感じ本書を読むことにした。「すぐやってしまう環境を作り、すぐやる感情を作り出すことが大切」と示されており、やれない自分を責めるのではなく、なぜやれないのかやる人との違いは何なのか考えることが必要であると気づくことができた。

審査委員講評 南谷 直利 (経済経営学部教授)

「今、自分にできることに集中すること」(本書引用 235 ページ) では 20% 頑張ると、1 を 1.2 にすれば $1.2 \times 1.2 \times 1.2 = 1.73$ になり、約 2 倍の行動力を手にすることができることが強調されていた。そうすると適当に (0.8) 立ち居振る舞えば $0.8 \times 0.8 \times 0.8 = 0.51$ となって、高くない仕事量へと変わってしまうように思える。自分にできることに対する意志の僅かな違い ($\pm 20\%$) が、「すぐやる人」と「やれない人」を決定するように思ってしまう。本来、人は自分の好きなことしか選択しない。すぐやるかやらないかの区別よりも、好きな事案の優先順位の違いを指標とした方が、早い行動とそうでない行動をあらわすように感じる。学生にとっては、好きでない事案でも最優先にやらないといけないことがある。なかんずく、義 (人の正しいおこない) の行動を「すぐやる人」に変わると、本書の意図は活かされるに違いない。

優秀賞 (書評の部)

新型コロナウイルスの利用法

国際コミュニケーション学部 1 年次生

坪内 心音さん



書名 なぜ世界を知るべきなのか
著者 池上 彰
出版社 小学館

本書では、新型コロナウイルスによる厳しい現状と、私たちがこの現状をどのように受け止め、世界とどのように関わっていくべきかを池上彰氏が考察している。現在、世界中が新型コロナウイルスの感染拡大に悩まされており、海外に旅行することはおろか、日常生活にさえ大きな影響をきたしている。しかし、新型コロナウイルスは初めての爆発的な感染症ではない。今までも数多くの感染症に悩まされ、ワクチンが開発されていない時代の人々はその度に感染症に打ち勝ってきた。現在は海外に行く

ことは出来ないが、そのような時期だからこそ海外に関する情報・知識を蓄え、今後の学びに活かすことができるのではないだろうか。本書では、世界の多様性、海外の日本に対する評価などを通して、私達が多種多様な社会の中で生きていくために今身に付けるべきものについて述べている。

本書ではまず、なぜ世界を知る必要があるのかという疑問点に着目している。著者はその疑問の答えを、多種多様な世界を知ることで、狭い日本の常識にとらわれることなく、視野を広げ、成長することとしている。また、世界を学ぶことで、自分がいかに無知であるかを知ることができ、成長に繋がる。しかし、ほかの国々を知るだけでは、成長できるとは言いきれない。なぜなら、自国を知らなければ、世界との違いに気づけず、比較できないからである。また、自国を知ることはコミュニケーションを容易にする。世界規模で解決すべき問題、例えば環境問題やSDGsなどに共に取り組む仲間が自国をどのように評価しているのかを知ることがとても重要なことである。また、他国と上手く付き合っていくには、その国の立場になって考える姿勢が大切である。その国にはその国なりの言い分があるため、国際情勢やその国の歴史にも注目しなければならない。

このように海外に行けない状況であったとしても、国際理解のためにできることはたくさんある。そのため、現在を「海外へ出るための準備期間」として考え、情報・知識を蓄える期間として有効活用すべきである。また、多様な社会で生きていくためには、「異なる考え方、価値観を尊重し、理解し、助け合おうとする姿勢」を身に付けていかなければならない。

本書で著者は特に海外へ渡航できないという状況下で、どのように世界について学ぶのか、なぜ学ぶ必要があるのかという点に着目している。私は著者と同じように、この新型コロナウイルスによる苦しい状況を逆手に取り、自身の成長に活かすべきであると考え。現地でしか学ぶことのできないことも多くあるが、自国でこそ学ぶことも多くある。それこそが新型コロナウイルスの利用法ではないだろうか。私たちが今学ぶべきこと、持つべき姿勢について考え、今後の成長につなげるべきである、ということが本書における結論である。

審査委員講評 關谷 暁子 (医療保健学部准教授)

国際コミュニケーション学部の学生の方らしい選書とと思いました。著者の池上彰さんは、本書の中で、若い人たちに向けて「世界を知ること」の重要性を説いています。坪内さんはそのメッセージを素直に受け止め、海外の国々や、国々の間に存在する問題を知り、自国を客観的な目で見つめることの大切さについて記述されています。「コロナ禍で海外渡航できない状況を逆手に取り、今学ぶべきことや持つべき姿勢を考え、今後の成長に繋げる」という向き合い方を、「新型コロナウイルスの利用法」というタイトルで表現された点には、良い意味での「したたかさ」と、未来に向かう「逞しさ」を感じます。

◆◆ 第21回読書感想文・第3回書評コンクール表彰式 ◆◆



第21回読書感想文・第3回書評コンクール受賞者コメント

第21回読書感想文・第3回書評コンクールで、最優秀賞、優秀賞を受賞した5名から次のとおり受賞のコメントをいただきました。



最優秀賞（読書感想文の部）

薬学部3年次生 宮崎 琴音さん

この度は最優秀賞に選んでいただき、非常に光栄に思います。私は昨年読んで違和感が残っていた本を再読し、感想文を書きました。自分が心惹かれる部分が、月日や自分の成長と共に変化していたことに驚きました。読書感想文コンクールは1冊の本と自分の感情に素直に向き合える貴重な機会だと感じています。これからも色々な本や考え方との出会いを楽しんでいきたいです。ありがとうございました。



優秀賞（読書感想文の部）

経済経営学部3年次生 落合 裕香さん

この度は優秀賞に選んでいただきありがとうございます。題名から内容が気になり何気なく手に取った本でしたが、読んでいくうちに引き込まれ、すぐ読み終えてしまうほど面白い内容でした。「お金の本質について考えることのできる本」と聞くと難しそうに聞こえますが、いろいろな例えを交えて分かりやすく読みやすい作品となっているので、皆さんも是非読んでみてください。



優秀賞（読書感想文の部）

医療保健学部1年次生 岡本 朝夏さん

今回、優秀賞に選んでいただき本当にありがとうございました。最近本を読むことがあまりなかったのですが、今回の読書感想文コンクールがきっかけで、改めて本を読むことの楽しさや面白さに気づくことができました。これからも読書を楽しんでいきたいです。ありがとうございました。



優秀賞（書評の部）

経済経営学部1年次生 高村 勇氣さん

今回の読書感想文・書評コンクールで優秀賞に選んでいただき、ありがとうございました。優秀賞をとれたことは大変嬉しく思います。自分自身がすぐに行動できる人間になりたいと感じ、すぐやる人とやらない人の特徴を述べている本を選びました。本を読むことで、簡単に多くの知識が身につくので今後も読んでいけるようにしたいです。



優秀賞（書評の部）

国際コミュニケーション学部1年次生 坪内 心音さん

今回はこのような賞を頂くことができ、本当に嬉しかったです。普段本を読む機会のない私ですが、読んでみるととても面白く、ためになるような事ばかりでした。今後も読書が続けたいと思う機会となりました。本当にありがとうございます。



◆◆ 第4回ビブリオトーク開催 ◆◆

令和3年12月22日(水)、第21回読書感想文・第3回書評コンクール表彰式の後、第4回ビブリオトークを行いました。今回は最優秀賞・優秀賞の学生4名と図書館委員、図書館事務課職員が円座になって行い、入賞者は自分の選んだ本について熱く語りました。またトーク後は、審査員の方から学生4名に向けてトーク後の感想や講評をいただきました。



◆◆ 読書感想文・書評コンクール入賞者が読んだ本 ◆◆



本館



薬学部分館

本館1階の読書コーナー、薬学部分館のエレベーター前に入賞者が読んだ本を展示していますので、是非、読んでみてください！

◆◆ 寄贈図書 ◆◆

本学の役員・教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

自著の寄贈	寄贈者
編集：『薬の影響を考える：臨床検査値ハンドブック』第4版 計2冊	三浦 雅一 (理事・薬学部教授・地域連携センター長)
書名	寄贈者
『星落ちて、なお』他	計2冊 泉 洋成 (理事)

北陸大学図書館報 NO.52 令和4年3月31日発行

編集・発行：北陸大学図書館 〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1 TEL. 076-229-3021 FAX 076-229-4850
Eメール：lib@hokuriku-u.ac.jp 北陸大学図書館ホームページ：<https://www.hokuriku-u.ac.jp/library/>

長期ビジョン 北陸大学 Vision50 (by2025) ……2025年までに学生の成長力No.1の教育を実践する大学となる。